鍵屋崎恵が安田恵になり三か月経った。

「おはよ順。コーヒー淹れよっか」

「起きてたのか」

「締め切りに追われてね」

「海外の機関紙に頼まれたヤツか。年を考えろ、徹夜は障るぞ」

「言うなあ。そっちも同い年じゃないか、仕事に忙殺されてるのはお互い様だろ。で、コーヒーは」

「濃くしてくれ」

「了解」

同居人は朝が早い。安田が起きる頃には既にダイニングテーブルで新聞を広げている。今朝もカジュアルなシャツとスラックスに着替え、リラックスした居住まいでコーヒーを飲んでいた。鳶色の髪が一房跳ねているのはご愛敬か。

「立ってるぞ」

「出勤前には直す。大目に見てよ」

「だらしないな」

「君こそ、目の下に隈ができてる。顔洗ってきたら?」

「言われなくても行くところだ」

キッチンカウンターに置かれたサイフォンの中、こぽこぽ泡を立て黒い液体が蒸留される。透明なフラスコの内部をコーヒーが滴り落ちてく様は化学の実験を思わせ、見ていて飽きない。

これは斉藤が新居に持ち込んだものだ。「本格的なコーヒーを飲みたい」というのがその理由で、安田も賛成した。

一旦洗面所に引っ込んで顔を洗い、ハンドタオルに雫を吸わせる。家庭的な柔軟剤の香りに包まれ、面映ゆさと違和感を覚える。洗面台のコップには青・オレンジ・ピンクの歯ブラシが三本立てかけられていた。

起床後はまず歯を磨くのが安田の習慣。寝起きは口内の雑菌が繁殖し、不衛生極まりない状態なのだ。青い歯ブラシを手に取り、チューブから歯磨き粉を搾りだす。

それを口に突っ込んだ直後、痛恨の失敗に気付いた。反射的に蛇口を捻り、コップに水を汲んでうがいをする。左手のチューブを一瞥、「お子様用 いちご味」の表記にげんなりする。

この場に斉藤がいなくて助かった。見られたらさんざんからかわれるところだった。

いちご味の歯磨き粉は同居が決まった時に買いそろえたもので、恵が愛用している。

正しい歯磨き粉を搾り、機械的に磨き直す。甘ったるい後味を払拭すべく口をよく濯いだのち、蛇口を締めてキッチンへ引き返す。

「おかえり」
爽やかに微笑みかける斉藤を無視し、指定席に掛ける。キッチンテーブルの椅子は三脚。向かって右手に斉藤と安田が、左手に恵が座る。斉藤が差し出すコーヒーに口を付けると、漸く頭が回り始めた。
「恵は？　まだ寝てるのか」
「六時だもの」
「そうか。そうだな」
「朝食はどうする？」
「今日はパンの気分だ」
「トーストと目玉焼きとサラダでどうかな。新しいジャムを買ったんだ」
「何味だ」
「アップルアンドシナモン。気に入ってくれるといいんだけど」
「甘いものは苦手だ」
「そういうと思って、君にはルバーブジャムを用意した」
「ルバーブ？」
「セロリの仲間でパリッとした食感と強い酸味が特徴。一般的な調理法は果物に近くて、海外じゃパイやクランブルとかデザートに用いるんだって」
「糖分控えめならなんでもいい」
斉藤は料理上手だ。離婚後は自炊をしていたせいか、和・洋・中大抵の料理は作れる。
寝室から持参したラップトップパソコンを開き、昨夜の作業の続きを再開する安田に対し、斉藤は話題を向ける。
「東京プリズンから逃げた囚人は四割捕まったみたいだね」
「まだ四割だ。残り六割は消息不明、都下のスラムに潜伏した可能性が高いと当局は見てる」
「池袋・渋谷・原宿・新宿……全部捜すのは骨が折れそうだ」
斉藤が読む新聞の一面には、極東の砂漠に存在する東京少年刑務所を、上空から俯瞰した写真が載っていた。プロペラのうるさい駆動音を思い出し、自然と顔が歪む。
「全く、見世物じゃないんだぞ。人の気も知らないで」
「頑張りすぎると過労死しちゃうよ。ほどほどにね、所長さん」
「その呼び方はよせ」
「嫌？」
斉藤が悪戯っぽく微笑む。安田は憮然とし、マグカップを口に運ぶ。
「馬鹿にされてる気分だ」
東京少年刑務所の新体制が発足し、安田が所長に就任して数年。依然囚人の殆どを捕まえられず、国の威信は揺らい

でいた。
「そろそろトップの肩書に慣れたんじゃない？」
「所詮繋ぎにすぎん。いずれ相応しい人材が派遣されれば喜んで明け渡す」
「君以上に適任なんていないよ。僕が保証する」
「買いかぶりだ」
安田が苦々しげに呟き、斉藤が前に積んだファイルを見る。
「これ？　囚人、ならびに看守の精神鑑定結果。全員診るにはまだ手が足りないけど、少しは改善されたかな。週一のカウンセリングも義務化できたし」
「ちゃんと働いてるんだな」
「給料分はね。君こそ、ブラックワーク廃止に踏み切ったのは英断だ」
「あんなふざけたシステムが黙認されてた方が異常なんだ。私の目が黒いうちはリンチの死者はおろか自殺者とて一人も出さん」
「その意気その意気。お代わりいる？」
「もらっておく」
鼻歌まじりにコーヒーを淹れる斉藤を眺め、パソコンのキーを打鍵している最中、静かにドアが開いた。
「おはよ、恵ちゃん」
「……おはようございます」
斉藤が笑って挨拶すれば、パジャマ姿の恵が眠たげに目を擦り、形だけ会釈をした。
「もうすぐ朝ごはんだ、着替えてきなよ」
「お手伝いします」
「待ってる」
洗面所に駆けてく後ろ姿を見送り、挨拶しそびれたことを悔やむ。再びキッチンに現われた恵は、動きやすいシャツとズボンに着替えていた。
「冷蔵庫から卵とってくれる？」
「はい」
「ありがと。片面焼きと両面焼きどっち？」
「普通の目玉焼きがいいです。コップにミルク注いどきますね」
「気が利くね」
忙しげに立ち働く男と少女は実の親子のように打ち解けて見えた。台所を行ったり来たり、朝食の支度にとりかかる二人を見比べ、安田は居心地悪げに俯く。
十分後、テーブルに出来たての朝食が並ぶ。香ばしいキツネ色のトーストとレタスをちぎった新鮮なサラダ、半熟の目玉焼き。
「いただきます」
「いただきます」

「……す」

斉藤と恵が綺麗に唱和し、またしても安田だけ出遅れる。

空回り甚だしい。【以下続】